古代集落の構造把握にむけた中間まとめ

道上祥武（奈良文化財研究所）

Ⅰ　はじめに

「古代集落の構造と変遷」の企画を開始し、報告書も本書で３冊目となる。古代集落の具体的な構造を解明するという壮大な目標に対して設定した当初計画によると、今回はおよそ中間地点にあたる。本稿では、過去２回の研究集会で取り上げた各地の集落遺跡を対象とする分析をおこない、これまでの研究成果と現状の課題を共有することで、次回以降の研究集会の方針を明確化する。

Ⅱ　古代の集落構造に関する論点

（1）建物群

本企画において古代の集落構造を考える上で大きな論点となってきたのが、竪穴建物または掘立柱建物の小集合である「建物群」に関する理解である。かつて、畿内の古代集落の総括的整理をおこなった広瀬和雄は、「集落を構成している基本的な単位は建物群であって」「集落はいくつかの建物群のルーズな結合としてとらえられる」とした（文献８）。過去２回の研究会では、畿内地域以外でもこうした建物群のまとまりが認められることが指摘された。ただし、こうした建物群の多くは区画施設をもたず、規模や構成も多様である。集落におけるいかなるまとまりを建物群と認定するか、その根拠について、実例に立ち返りつつ、検証していく必要がある。

（2）倉庫

もう１つの集落構造に関する論点として、倉庫の所有形態がある。過去２回の研究会では、倉庫をもつ建物群と倉庫をもたない建物群だけでなく、複数の建物群が倉庫（群）を共有するパターンが少なからず存在することも指摘された。古代における集落共有の倉庫の存在は既に指摘があるが（文献４）、その時期的・地域的偏差を示していく必要があるだろう。倉庫の存在形態は、建物群相互の関係性や集落内部における集団編成原理にも大きく関わる問題である。

（3）検討の方法

本稿では、「建物群」・「倉庫」という２つの観点から、過去２回の研究集会で取り上げた各地の古代集落の分析をおこなう。具体的には、各地の集落を構成する建物群の占有面積とその組成（建物数、種類、規模、倉庫の所有形態など）を整理し、建物群の実態を再確認するとともに、地域を越えた共通点を抽出する。

建物群の認定は基本的には各地域の担当者の見解にもとづくが、一部、担当者とは異なる見解であったり、筆者が独自に認定したものも含まれる。建物群認定の際は、区画施設が検出されているものについてはそれを優先し、建物分布の粗密、建物方位、竪穴建物のカマド配置と想定される入口などを考慮した。なお、建物群を長方形で示したものが多いが、分析上の便宜的な表現であり、建物群が方形区画を備えることを意味しない。

Ⅲ　事例の検討

（1）筑後国御原郡の事例

筑後国御原郡では、集落が内包する生活単位に関する検討がかねてより進められてきた。ここで取り上げる集落遺跡の建物群の把握は、山崎頼人氏の集落構造分析の結果にもとづく（文献11）。

上岩田遺跡　上岩田遺跡は地形、遺構の密度や内容から官衙域・官衙付属域・首長居宅域などに区分され、ここでは「官衙近接集落」にあたるＣ区を取り上げる。Ｃ区遺構群は０～７期に分類されており、３期（７世紀末・８世紀初）～６期（８世紀第３四半期）にかけて、面積の大きい建物群が中心に存在し、その周辺に比較的面積の小さい建物群が分布するという集落構成をとる。４期（８世紀第１四半期）の建物群を例示す

ると、ａ群がもっとも大きい4,196.0 m²、周辺の建物群ｂ・ｃ群がそれぞれ409.0 m²、536.9 m²の面積をもつ（図1）。ａ群は掘立柱建物主体だが、やや大型の掘立柱建物（B 204、34 m²）と小型の竪穴建物、複数の総柱建物という構成をもつ。ｂ・ｃ群は４期に関しては廃棄土坑を備えており、生活の単位として判断できる。しかし、５期以降は総柱建物のみが複数まとまる建物群になっており、これは倉庫域であろう。

干潟遺跡群　干潟遺跡群は筑後国御原郡日方郷に比定される集落遺跡である。過去の検討から、竪穴建物２～５棟、掘立柱建物１棟、廃棄土坑１～２基という生活単位が把握されており、この小グループについて、「房戸」との関係性が指摘されている。ここでは山崎氏が分析をおこなった、干潟遺跡10および干潟城山遺跡の集落を取り上げる。

干潟遺跡10では６世紀末～８世紀前半の遺構変遷が示されており、７世紀前半～８世紀前半の遺構群について、建物群が把握されている（図2）。７世紀後半～８世紀初頭（干潟Ⅱ期～ⅢＡ期）には、１つの建物群と廃棄土坑群がまとめられ、建物群は1,308.5 m²の面積をもつ。大型の竪穴建物を中心に、小型の竪穴建物と掘立柱建物、倉庫、廃棄土坑群を含んでいる。８世紀前半（干潟ⅢＢ期）の建物群も内部の構成はほぼ変わりなく、大小の竪穴建物と２棟の総柱建物からなる。建物群の面積は855.0 m²とやや小規模化しているが、南側の廃棄土坑群を含めると、前代との面積差は少ない。その他の時期を含めて、干潟遺跡10の建物群は、いずれも10～30 m²の竪穴建物が５棟以下で構成され、倉庫とみられる小型の掘立柱建物を含んでいる。

干潟城山遺跡では７世紀中頃～８世紀前半の５期の変遷が示された。遺構分布にもとづいた建物群のグルーピングがおこなわれ、７世紀中頃～後半（干潟Ⅰ期）の遺構群では合計７つの建物群が把握されている（図3）。調査区外に広がるｆ・ｇ群を除き、ａ～ｅの建物群はおよそ600～900 m²となっている。建物群の内容は干潟遺跡10と基本は共通し、２～６棟の竪穴建物と少数の掘立柱建物で構成される。その中でも、やや大型の竪穴建物が含まれるｂ群、掘立柱建物がまとまるｃ群、比較的小型の竪穴建物で構成されるａ・ｄ・ｅ群など、格差が認められる。なお、a群は竪穴建物のみで構成され、他の時期にもこうした竪穴建物のみの建物群が存在する。これは、基本的に掘立柱建物を含んでいた干潟遺跡10や同時期の薬師堂東遺跡（文献11）とは異なる点である。干潟城山遺跡には相対的に小型の竪穴建物が多いことも含め、遺跡間の格差が認められる。

上岩田遺跡、干潟遺跡群の建物群を取り上げた。小規模な建物群で400～900 m²、やや規模の大きい建物群で1,600 m²以上、上岩田遺跡Ｃ区では4,000 m²を超える面積をもつ建物群が確認できた。倉庫の所有形態に関しては、上岩田遺跡Ｃ区で干潟

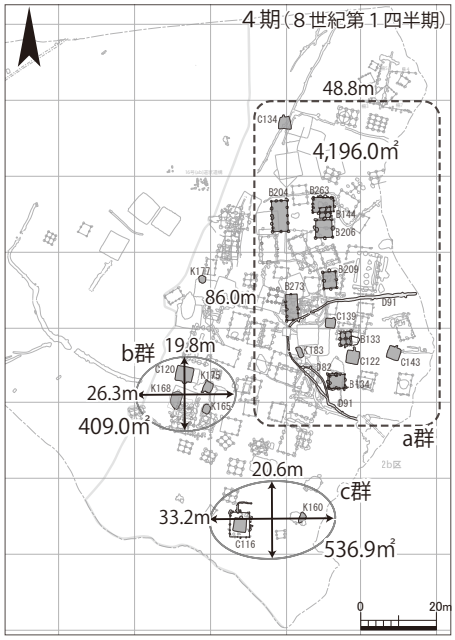

図１　上岩田遺跡Ｃ区４期建物群　１：2000

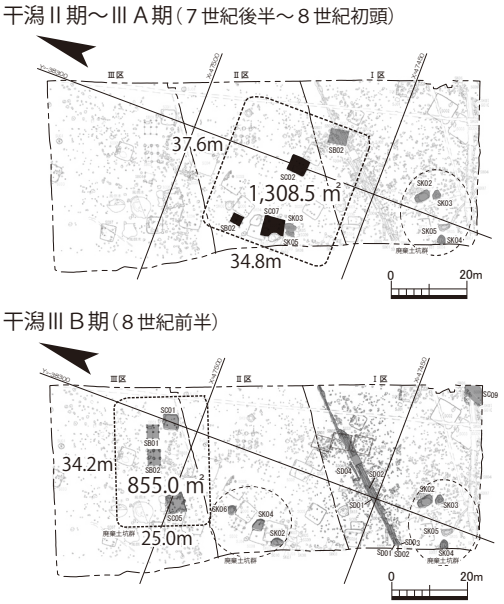

図２　干潟遺跡10干潟Ⅱ～ⅢＢ期建物群　１：2000